新刊紹介

チベット語古典文法學

稲葉正就著

去る昭和二十四年春、本書の著者が「古典西藏語文法要論」をプリント版で公けにしたとき、筆者はおこがましくも、つたなき筆をもつて、ときの大谷學報（二九ノ一）に紹介し、その書出現の意義を强調するとともに、活字印刷による再版の一日も早く行われんことを切望しておいた。それからまたたくまに、五カ年の時日が經過した。この間、著者は〝篤學の士〟という呼稱にふさわしく、孜々として倦むことなく研究に精進し、逐次に大谷學報（三三ノ二）、大谷大學佛教學會々報（六）、印度學佛教學研究（一ノ一、一ノ二）、佛教史學（三ノ三）などにその成を果發表したのであつた。はたせるかな、今回それらの綜合成果ともいうべき「チベット語古典文法學」が四〇〇頁をこえる大册として、みごとに公刊せられた。斯學に關心をもつわれわれの喜びこれにすぎないものがある。

著者の意圖によれば、本書は古典チベット語で書かれた文獻を確實に讀んで、正しく理解しようとするために、トンミ・サムブホータ Thon-mi sam-bho-ṭa の文法を根柢とするチベット文法學に加えるに梵語の影響を論じて「古典文法學」なるものを構成して、その要點を論述するにあることが知られる。そこで、トンミの文法に關する研究を一瞥するに、フランスにおいて、バコー J. Bacot が一九二八年に「トンミ・サムブホータの文法偽 Les Ślokas Grammaticaux de Thomi Sambhoṭa」を出して、その研究の緒につき、その後一九四六年に、同じくバコーが「文學チベット語の文典 Grammaire du Tibétain Littéraire Vol. 2.」を世に問い、一九五〇年には、ラルー M. Lalou が古典チベット語の初歩綱要 Manuel Élémentaire de Tibétain classique」を出版し（本書四二頁）、ほぼ古典チベット語の學問的な仕方が明示されたのであつた。（山口益『フランスに於ける「初期佛教チベット學」をめぐりて』關西大學東西學術研究所彙報第四）。もつともその間には、ドイツのシューベルト J. Schubert や、日本の井原徹山氏の研究もあつた（四五頁）が、學問の主流は、上述のフランスに於けるそれであろう。ここにおいて著者は、これらの諸研究をつぶさに檢討しつつ、トンミ文法の「三十頌 sum-cu-pa」と「性入法 rtags-kyi ḥjug-pa」に基礎をおき、その根本的研究に從事して、トンミ文法の特色をとらえることに成功し、それから發達したチベット諸文法家の解釋に一々眼を通して、それらを批判しつつ、チベット語獨自の文法學を構成したのである。

まず序論の古典文法學發達要論（一—四九頁）を見るに、とくに、トンミ文法學がインド文法學のカータントラ Kātantra の系統にあることを明かにしたこと、および「三十頌」と「性入法」に對するシツ Si-tu の註釋に重點をおいて、シツがサンスクリットと比較してインドの文法學にまでさかのぼつてはいるが、決してサンスクリット的な考え方にとらわれず、それから脱却し、チベット語本來のあり方えと進んでいることを指摘した點は重要である。

本論である古典文法要論（五〇—三一三頁）は、前著「古典西藏語文法要論」とその骨組は大體同じものと思われるが（前著の第二編品詞論が本書では第二編自立語、第三編附屬語の二つにわけられている）、前著の補正といつた程度のものではなく、全篇が書き改められて、全く面目を一新している。具體的且つ詳細に、個々の問題について、その研究の進んだ點をあげて紹介することは限られた紙數では困難であるが、とくに眼のつくのは、聲音に關するもので、シツがチヤンドラゴーミンのヴルナ・スートラ Varṇasūtra に基いて述べている點を明かにしたこと（五二頁）、基字の性 liṅga に關して詳しい檢討がなされたこと（五五—五八頁）、複合形基字に關する部門がよく整理せられ、さらに「具慧生歡喜」の異說をあげて、添後字の異つた性の分類の仕方のあつたことに注意する點（八〇頁）などである。しかし何といつても焦點は動詞論（一三七—一八一頁）にある。從來の動詞の變化という概念を離れて、動詞の活用としている點は、著者の學問の深化を示すものではなかろうか。そこの研究はまだ未審の問題が殘されているようであるが、それは著者の新たな課題として今後に期待するものである。第四編の文章論（二五七—二七五頁）は、著者がかねがね究明しようと念願していたチベット語獨自の文章構成法（シンタックス）に進んだ努力の跡がうかがわれる。しかし未だ日本語の文章構成法の借り物という難がないではないが、いずれの東洋語にあつても、獨自の文章論が確立されていない現段階では、完璧を期するのはけだし無理なことであろう。第五編梵語よりチベット語への飜譯（二八〇—三一三頁）は、佛教聖典研究に資する意味で、本書の特色の一つをなすものであり、梵語に造詣の深い著者にして、はじめてよくなし得る部門である。前著の第五編漢文藏譯論に相當する部門は、今回は省かれたが、著者にはすでに「圓測解深密經疏の散逸部分の研究」（昭和二四）があり、工布査布（清朝番學總管の地位にあつたチベット語學者、モーコ人）の行つたような藏文漢譯、漢文藏譯の兩面からよりする研究が進んでいるものと考えられるから、今後を期待してよいわけである。最後に、行き屆いた配慮から、法賢造「シツ註の講義」の譯註（三一四—三六三頁）を附編とし、さらにそのチベット本文（一—四四頁）を大谷大學圖書館所藏の鮮麗重厚な活字で組んで附錄としている。

さて、ここに、この劃期的な文法學が現われたことについて痛感せられることは、著者の直接の師である山口博士や、著者の研究に刺戟を與え、且つまた、大いに著者を啓發したであろうと思われるバコー教授やラルー女史の研究を培つたフランス言語學の傳統的なあり方による示唆である。フランスに於ける現代の言語學研究は、おそらくアントワヌ・メイエ Antoine Meillet (1866—1936) から出ているものと考えられるが、彼の立場として注目せられる點は、その專門である印歐語にあつても、常に全印歐語的見地に立つて、各派の個々の言語現象の說明をあたえ、その背後にある文化史的事實を絶えず顧慮しつつ進むという態度である。これは言語學が比較言語學の輸入から始まつて、眞に科學として樹立せられたフランスにあつては、當然の行き方なのであろう。メイエ以後、メイエを繼

ぐ幾多の學者、わけてもわれわれの學問に深い關係のあるソグド語のゴティオ R. Gauthiot や、バンヴニスト E. Benveniste にしても、はたまた梵語のレヴィ S. Levi、ルヌー L. Renou、ブロック J. Bloch にしても、いずれもその傳統をうけついでおり、パコーやラルーの學風にも、もとよりその精神は流れている。この觀點からすれば、チベット語の研究には、ネパールのネーワーリー Newari 語、ブータン、シッキムのレプチャ Lepcha 語、アッサムのボド Bodo 語、ナーガ Nāga 語等の、いわゆるチベット・ビルマ語族に對する研究も必要であろう。コルディエの目錄を一見しただけでも、インドの典籍がチベット語に飜譯せられる際に、ネパールの土地およびネパールの學僧が擔つた役割はけだし相當なものがあつたことが知られるのである。著者には、すでに「形態論より見たるチベット語文法」(田邊一郎氏と共著、昭和二八)があつて、その方面に對する關心は示されてあるが、一般言語學の領域の中で、さらに、より幅の廣い分野で、チベット語の有する特質を究明し、それがチベットの思想や文化に對して果してきた、ないしは果しつつある役割を鮮明にしてほしいものである。ラルー女史が印歐語中心の言語學的溫床のなかから東洋語獨自のあり方に眼をつけた炯眼には敬服の他はないが、その點では、著者はすでにパコーやラルーを超えていると思われる。しかし、そのようなことが更に確信をもつて云えるために、著者がウオルフェンデン Wolfenden 氏の立場からも、更に一層の研究を積まれんことを切望して止まない。本文法書に盛られた研究によつて、著者はすでに自己の學問的立場を樹立したのであるから、たといチベット・ビルマ語の領城に、研究を擴大せれらるとしても、デュール Jacques Dürr 氏のように、苦境に陷入ることは、まずあるまいと考えられるからである。

—本文三六三頁、附錄四四頁、諸索引二〇頁、文部省科學研究助成費、研究成果刊行費の補助による出版、昭和二九、一〇、法藏館發行、定價一、一〇〇—

(佐々木敎悟)

西藏佛敎研究

長尾雅人

西藏佛敎の研究は、世界の諸學者によつて幾多の收獲があげられてをり、その風貌は概ね明かにせられたといつてよい。しかし從來の西藏佛敎の研究は、主として歷史的あるひは習俗的な面にむけられた外貌に關する研究であり、敎義に關する內面的研究は比較的ゆるがせにされてゐた。敎義的な研究の諸資料は、西藏大藏經とは別に、いはゆる「藏外文獻」として尨大に存在するのであるが、これの解明には文獻的あるひは語學的な大きな障害が伴ふために、これら文獻の研究は今なほ殆んど學界に發表せられていない。ここに紹介する長尾博士の「西藏佛敎研究」は、この障害をのりこへて始めて西藏佛敎の內面への突入を試みた勞作である。

本書に於いて取り扱はれる文獻は、宗喀巴(Bts'on-kha-pa)の著である「菩提道次第論」(Lam-rim)の毘鉢舍那章であり、この毘鉢舍那章の譯出が本書の中心をなしてゐる。周知の如く宗喀巴は、西藏へ入つた印度大乘佛敎學の諸流を統